

周易鈔

革 豊 明夷
師 艮 貞

三

皇山文庫藏書

皇山文庫藏書

皇山文庫藏書

皇山文庫藏書

澤火革

○繇曰、革己日乃孚元亨利貞悔亡。

革䷰ あらた

もろともぞ、ぬりにと慶。あくたむるとは、の俄ニワカ、み信ぜざる

小なり。己日乃孚ナツノフと云。弊壞の風ハリふきほり、あらむとホモ

かりテたゞ、道ハシ小あハシたむれば、後悔ハシメなむあり。けし翁カクウ改ハシメ

と正ハシメよかハシメい悔ハシメるとなむに厚ハシメく。お忙ハシメぐとホモひり、

○彖曰、革木火相息、二女同居其志不相得曰革。

水火二卦、革の象也。莫若以ミヤウナリとちりと、始ヒタチて、往ハシメく。往ハシメくは、疑ハシメりあり。况ハシマ考ハシメの子を

主ミタマ先王の妻革ハシメばよし。初ヒタチは疑ハシメりあり。況ハシマ考ハシメの子を

ゆでは、弥情極原、一、肉文院の徳あると、外風らうぎ
あひがひ革モトシナムアレバ、其情なきこと極也。玄證より天
地革て、是時、臘陽武革命、乃よ此ノモトシナム。意甚と云ぞ、はん
持と以改るをあらば、天下カミハシ無事、ノモトシナム。情もて、
○象曰、澤上有火革君子以治歴明時、と云ハ此卦
上には、先の仄小く、下は、難のたあり、君子此象と凡く、治歴
以時、けんわゆく、あきらかと革、則の豆、みなげきさく、慎
みくと有り。

○初九、革用黃牛之革、贊^{カウ}之革の初九、

初の夏革ハ、莫大なるもの、其時より、子傳よりきて、
其才ありて、寫小情と後革、きば、情うとなむぞ、けんわく、
中絶の道よほく、旁よ動く、改革の情うき、廢うよ情を、
○象曰、革用黃牛不可^{ラズ}以有爲也、と云は革の時す、あ
き共、革のわがうかよ、主時其位を情、中絶の道を、因を
ろのいわゆくと有り、

○六二、己日乃革之征吉无咎、けあ、立^{シテ}上、上の剛陽
の元^スお無^シ、因^シ中^シの道を、立^{シテ}無^シ、偏^{ヒト}小敵^{シテ}立^{シテ}と有り、
文^{シテ}よして、以^シすれバ、事の程を、立^{シテ}とよあましむ様、權

物をもゆゑてけん務を、原野よりして道す遠事なきの
徳義あらば、天下の弊をあらため、家國のはま立ちとゆれ
金一、ちよは御づきとも、漸くよあらたむる行あらば、ちよ
／＼智をからむと云ふあり、

○象曰、己日革之行有嘉也、と云者、革の時す尚で、五
の焉よよく焉どく、其才文ぬよモ徳厚に至位中正、此ニツ
のものと慎むべ、革と善がん徳を物としゆらかゆる要
革を去からんを更どく遡とあらば、主功を以喜め
と云ふあり、

○九三、征凶、貞厲。革言三就。有孚惠心，勿處。下の
占よありて、けんきんかく、革よしきがときもので、貞正の
道守。革言三就。とぞ審よ察して、云々もく信向き
をけん約よて、革とせ違引して、時と失つとはよからず、
革爲きとありて、くち信ひとく小於てハ、主筋よ徳の筋
かくえむをり、

○象曰、革言三就又何之矣、と云は、我一人の志あらず、
衆人小誓三才もく革ハしたゞ理すらがすの無ふきばか
小未とあらず、からむせん行ゆく、率尔小なりば、又時すと達

ざるの情ふくと申すなり。

○九四、悔亡。有孚惠心，改命吉。此何を以て革の變を

下ともろきとよ追の時より、玄往よりもよ近位もあり、

との悔願きとよもく悔く、後よ革きバ、更革主理よあり

とて悔ふきぞ、生つわよて改ふきと其理よ叶財ト庶せば弊

あらたまきて上信ドリテ、かひて、吉也もど云氣あり、

○象曰、改命之吉信志也。ど云は、改事ト、下芳小信もあ

とは改くよに、けの如く、改革の支ハ、下芳もよ信まる

厚うふ慎ツシムど申せり。

○九五、大人虎變。占，有孚惠心，勿用，宜正乃

才也。是後小人之の道を、其爻を改ルとあらば、うらか

びして、人信ド、道行カラヌをあらべ、けん持少く、虎の文彩

のぞく、あきらうよ變化ちの情あらば、人孚コトとてよれり、

○象曰、大人虎變其文炳也。ど云は、其の明アラカみあると、虎

の文彩のぞく、小あきらうよあらば、衆アラカとよ、孚コトと云

玉ねがしん此の物ふく、只自の申すりあるとく、情もて否セ、

○十六、君子豹變。小人革面。征吉。はれを主而ハ、

革の体少く、あらたむもの取扱子て、君子は、豹の文彩も

○小改シモガタへ小人コトヒトは、皆ミツジもして極カタマリに在リ。内
心ハラハラより變化カタナシありとす、さもてしきシキばかり改シムへあきアキ、
けん持ケンシテて其ソ革面アラタマの正マサニをよく守リてすむがり、

○象曰、君子豹アラタマ變其文蔚也、小人革面順以從君也、と
云ハ、君子ヒトシへと善シる後タメて、主シメゆるとも、あらこれてすむがり、小人
なりとも、此シおどかシ、勇ヒカル氣ヒカルギで威ヨロシいとも、小なシびシが、
主シメゆ改シム、あらがシムてすむがり、

○元龜曰、豹變爲虎之課、と云は、物の変すると、豹の
虎となりざく、沒改徒新アラタメテアレキコニタガフの、いわふくをふり、

○ト彖曰、昔夏不昌益困時滯ヨウチ、と云は、昔の事昌カヤシ、
あらも滯ヨウチ、ある時トキの、宣教ケイセイゆく、漸ゼンく、通スル、新ハタハタ小要ヨウす
と、考ハタハタすの、始ハタハタきあハタハタに、主シメを改シムざく、少ハタハタく、
の、主シメの、ごくちるハタハタ、よもやまハタハタの情ハタハタく、とむがり、

○ト象曰、澤火革時須改革、就新玄故即相離ハナレヨ、
と云は、火の、よて木トキを改シムざく、形ハタハタして、我がほのけよ、
うち知シムる、心ハタハタを改シムく、若ハタハタ後タメの、いわふくハタハタをあり、
十干詩断曰、本是近モト、遭久コレ、と云は、久モニ、心ハタハタをあらざハタハタ、
王あり者ハタハタ、疑ハタハタをりまハタハタして、改シムづきハタハタて、ハタハタ決ハタハタして、

是よりあくがこのをとからざる極よ情よばかり

○雷火豊

○繇曰、豊亨、王假之、勿憂、宜日中、

豊其吉、不繩、

もも哉、凶卦也、うよいんうりてた、イシテ、アヤヒタと在

むりハ、王者比衆、（坤）と、普からざるを憂と、（震）是れ

流也、（艮）中内豊也、（離）と、普、我、往也、（巽）と、（離）

けりわゆて、少しか、もうぞ、ヰヰ、さば風、（巽）の情で、衆

人、（離）豊も（離）ふして、（離）

○彖曰、豊大也、明以勤，故豊。

（離）は、勤、（離）も、（離）

（離）わ意、（離）ありか、（離）豊、（離）王者、（離）の衆、（離）

とすら、天トは大せむ。我ニ係どをさむる處とゆ
リも、ひづれ、ひづれ。日乃あゆゆ。天ト御墨とく地
よか、すゞ、私のいづりともにゆり。日もけ経過ぎが、
もき、月も盈き、ばかりと行り。此の時晴で、月が空、
○象曰、雷電皆至豐、君子以折獄致刑。ライ デン ミニイタルハラシクニ シユウモテサダラタタナスケイヲ
畜ツクシありて効キ、レヒ離リハ、易シカ。此をとんで、折
獄致刑。又情害のまことと云ふ也。は度詳ワタガよどきのよ
うの情シラフとして、しれり。

○初九、遇其配アソノハシ、雖シテ旬无咎、往有尚。丁め、是亦は、問
ひの始ハジメにて、との九に、効キ、内初ナヘも、まきり、位スル。初と
四とね無ム、其よ陽剛ヨウジョウにて、化卦の陰陽、お無ムの義
黒シありとシテ。四はお無ムの義と、无咎ムカウとして、内
なる道ミを効キて、豐ヨウありとシテ。此ハシお無ムと、我ニモとシテ、
之のよき、しげにてお無ム、主自成シテふまとシテ行ム。
解ハシ因ヒトドされば、胡エツ越スル。之は因ヒトドの性シテをもつて、
○象曰、雖旬无咎、過旬災也。多吉は、人ヒトと因ヒトドして、力アリと
思ム。然シきと居リて、足アリ未シれば、よしとシテ、若シ我
神キミをシテよきとシテ、行ム。災アリのをシテ、げり持ムをシテ、モ旬シテ。

よ拂ンとあるべからき、折ニ怪でもあり、

○六二、豐其蔀、日中見斗、往得疑疾、有孚惠心勿吉、

何、里而ハ、豊ノ時、子尚て、蔀ノ主成トナリ、主ツテ内成

主の引り、上ニ子也、されど、ニシテ、原曉引カナ、豊レ、蔀凡斗

ゾク、日中子も、鳴居テ、成セ、主徳、我カ、功を、奪ズ

ナタヤ、より往て、従ト、すれバ、疑忌、ト、何セ、此ノ我、

徳、と、積ニ、て、上の志、セ、感セ、も、ナタ、我、道

と、行フ、ト、徳、セ、て、主の引、ト、ナム、主、義、引、

○象曰、有孚惠心勿吉、惠心勿惠、志也、

ナタ、我、主、徳、セ、行、テ、主、徳、主、徳、主、徳、主、徳、

主、徳、主、徳、主、徳、主、徳、主、徳、主、徳、主、徳、主、徳、

○九三、豐其沛、日中見沫、折其右肱、无咎、

主の、體の、上、あ、う、て、正、き、セ、ナ、ト、シ、主、子、也、

ナ、ト、ハ、柱、子、也、我、子、也、主、の、上、あ、う、て、主、

う、と、ハ、柱、子、也、我、子、也、主、の、上、あ、う、て、主、

○象曰、豐其沛、不可大事也、折其右肱、終不可用也、

主の、上、あ、う、て、主、の、上、あ、う、て、主、

うそとがくに、かかはれなれ様よへきど、元器と
ひきぬき

○九四、豊其蔀。日中見斗。遇其夷主吉。渙河、王少也。大
臣の位に起きても、中止する。さばかず、柔弱の主すあふて大
小豊かちとせり。リキ達、玄禪を内からけし候。日中
五星と凡るが如くみて、かつても遁くこと何むけ
り哉とて、上のゆからざりけはら、下モナリの主ともなを
けと成。尊れよれりのよきまち。仰おまくよれり。則
○象曰、豊其蔀。位不當也。日中見斗。幽不明也。遇其夷
主吉行也。ごくは、中止する。さばかず、柔弱の主すあふて大
小豊かちとせり。リキ達、渙河を内からけし候。日中
五星と凡るが如くみて、かつても遁くこと何むけ
り哉とて、上のゆからざりけはら、下モナリの主ともなを
けと成。尊れよれりのよきまち。仰おまくよれり。則

○六五來章有慶譽吉 以何、又爻豐の主がきども、往
來の才よりて其豊大の城を守め、己往去り下の章
義乃方めりのみもとて、是レ由されば福をみて、譽
のすにはまれあくもせりおれ能情で我亦比及ざる
とは、我身が居りて方能めりのなきとうけてよし
○象曰、六五之吉有慶也、とは、我身榮焉ありと
也

多く賢才のたまひをうらみに、我身の譽のまゝにら
む。福安又衆へすと及ばず。何もぞせいかと忙で、まじめ
上六、豊其屋。蔀其家。闕其戶。閨其尤人。三歲不覲。ヒトサーセイ
陔原歩きて、豊るアの様子。往りて、勁の強さが、ぬるぬるとして、
風うすく吹き、勁もとまらへ。何うかり、頂上に起きせり。陰
柔みて、あたへき。是よおして、勁たゞぎば。我よ空す。物の
多くへるに、ほし。渾にあらず。物の十分よからず。かく下モ
たらぬよ。お無事な極手情をもつり。

○象曰、豊其屋、天降翔也。覩其戸、闕其无人、自藏也。○彖曰、

元龜曰。日厭中天之課。云て。がれねの思ひ。りく。四
直うる。いど。うれぎ。理時。まをとる。道のゆかうよ。むき。
ま、みて。うれぎ。

○ト彖曰、火明雷響、と云は、めのうかぶりより、威勢をもたらす。

罔アシカニぐむ工アシカニくも、道のくもにとだれ松よ、情でよにあり、

○ト象曰、財豊利厚、賊用アツシひなみを残ハシメテ、我身落

よさるやど、もれり、

○十干詩断曰、進退意流吟心疑コト未成、と云は、進退城
なまよ、ゆき、行りて、ひう、に、全猶乃放志コトき、ゆの直シラ逢ツバタとありて、とく、もあざうの情をそ
それり、

○○地火明夷

○繇曰、明夷イハリアリ利カシ難ライニ貞タマナラ、明夷イハハ、晦カニ月カニとももぞ、日の晦カなる

夕カニの辻カニよしは、日カニと度カニするの義カニなり、君子は、時カニよ變カニては、
艱難カニある、更カニを知カニく、遂カニ正カニ義カニ守カニ、日カニをくして、かのさきカニ

ひに度カニす時カニも、けいおとカニ、もく情カニぐるにあり、怨カニき苦カニ、氣カニ残カニ、
くちく、肉カニと脂カニ小せざれば、火の上カニよかあきて、火カニと掩カニかふ、
氣カニの沈カニぎる度カニよん得カニあきて、よれなり、

○彖曰、明入地中イハルハチ、内文明而外柔順イハシナシ、以蒙大難ミモカニ、文王ホカ、
以之シテ、云ハ、肉卦ミツカブハ離ハセ小て、文カニの徳カニあり、卦卦カニカニハ坤カニの柔堅カニ、

るなり、時の宜うざる小あひてハ内心を照ふて、我道を
守リ外事無事と、徳をあらじよば、も艱難極むもと、大王
の義理ヨウリ、小まきせりとづくつて、モけいわと、云々はて、我
のまきせりとづくつて、時のは廻るよちこづの情ゆて古なり、
ハ馬を交あまきを地チヰト入ハ、故竈メイナツを極キタメる象キラナリや、君子是をきて、
昭テラキ用、更極カタマリて、より交あまきバ、傷ヤブレあるがれ、衆人よ臨メイサツ、よ聴ヒツク察
をきく、衆人のあこへ三、五まんすぢ極キタメよ、以シテて、寛厚
の道ミハをもげにわと情ミあまきて、古なり。

○初九、明夷于飛無其翼、君子于行三日不食、有攸往、主
人有言、けり、反處ホリ、歸カムぬと、卦ホリとされど、明夷の初
九、不食、不食、近カムと、或ツバサゆき、而ハタハタ、身カラ無ナシ、口ツバサも、口ツバサも、小
人の爲スル、み害ナシ、行ハタハタ、と、ものと取フふに、身カラはよ、
籌カウ城シテ、避ハタハタ、猶シテ、能ハセ、身カラをさへて、籌カウ城シテ
て、禍ハタハタ、避ハタハタ、猶シテ、能ハセ、身カラをさへて、籌カウ城シテ

○象曰、君子干行、義不食也、不以無、君よ幾ミと云て
避ハタハタ、方カタノ困窮コンクウ、シテ、莫モ見シざれバ、義の尚ヨウ無ナシ、
ご、我よ内ナカニ、有アリ、使ハサウエ、云ハシマツ、決ハシマツして、ナラリ、ト、云ハシマツ。

けん持と情でうれしかり、

○六二、明夷夷于左股用拯馬壯吉。此何主也。はめうる
才をひゆのたゞ一きと待て。往路よりはけよあく。まづ
夷かり。然しも陰陽の少人のためよ。凶。既往づとむりば
君すもまた能通何より。大股夷どく。主ひ残
御宿す。ひそひそと遡ふ。主や赦と馬の状あり。さぞ
きゆくさむとせゆて。主にげんおどひの日本ま
かたきとえく情でうれしかり、

○象曰、六二之吉順次則也。こえはげ六二の若かりと。凶夷
のけりとつゝた。能く岐路より。ざい。則の道確情す
候て。主吉残候と。うれしかり、

○九三、明夷于南狩得其大首不可疾貞。はあ。而ハ。ぬかる
才をソノ。下。下。居て。よのく。き。りのと敵。か。れ。也。燕。ぞ
より。我。ゆゆ。さき。の。時。と。さん。と。汝。然。大。因。潔。の。今
そ。す。れ。た。る。け。れ。ハ。意。を。改。去。が。く。ほ。く。よ。た。く。さ。ば。ば
屋。を。か。さ。づ。る。の。そ。け。ん。お。情。り。の。ど。あ。よ。せ。ぎ。る。す。よ
り。う。と。あ。れ。り、

○象曰、南狩之志乃大得也。云は。下。の。ゆ。り。く。と。上。の

久々に我がのせんとすり害めさせんがためあり。然るも
不度子のぞきまくさんとて、ひきおひり、りがり。

ちあはりけり。財物難ひよ、やうよ、けをもよこり。

○六四、入于左腹、獲明夷之心。于出門庭、以何、是亦は陰

柔めても、男を逆さに位す辰て、邪氣をもあび、文祥ある
す。ものこ、玄往よ、陰僻、柔邪るもともと、君の心よ。は
モ文除き、正行りよ。更かくざるござれば、以おと候。辟の

道よりとよよ河よ松よ、情うりて、もあら。

○象曰、入于左腹、獲心意也。心によハ、あらの物がる道を

以寫のゆよどり入るとは、信の道。河を、君の心跡
まよひすり、河の傍を以道よ河する。とせば、君乃
しよ入ると、よきやうみ、心て、えにふき。

○六五、箕子之明夷利貞。君子夷而公。小人夷而

君子夷よりすり、我よ徳義河りよ。河にては、銀雞
よ河。正行り、徳義とかくして、かと時して、財もあら、
内に河はもと故に、固ちりと等すが志のやうよ。情を守り、
うそえにふり。

○象曰、箕子之貞明不可息也。ことよハ、箕子患難より

と之たも志^シ貞固^{ヨリ}て、守^ル事^トふ失^ハげ^ル也^ト、時^ニ
あ^ハじて、禍^トき^ハ、道^ヲぢりて、志^モ無^カく^ハ、さる情^ニ

ノ
メイテラニ

○上六 不明晦初登于天後入于地。けり。是也ハ卦の體也。
みづり、晦夷の主ニ玄符ミヨリ、ちキ地チキニ居テ、モの事く四吉
晦ミヨシ、吉ヨハラクトモナリテ、ふ尚ミタマテ晦ミツキ、初シキニちゆ
ノミ天ミツキニジミジ、ごくゴクニ生ミタマ、後アフタニは夷ヤハラれて、地チキニ入ルがど

○象曰初登于天照四國也後入于地失則也。どきはゆき

る道を失ひ乍らよろこびてゐる所

○元亀曰鳳凰無翼之課。といふは鳳のうじに徳義有り
とも、翼^{ツバサ}無^{タレ}て、身の自由^{スル}あり^タまく、時^モ能^シ内^メ情^カて、

晴よ入の様子とおなじなり。

○ト解曰、明夷^{メイイ}下離^{シモリ}上坤^{シユン}日入地中^{ヒルチヂム}、と以て、卦の上坤を地

よか、どう下シテ、君タレハ因イクよか、どうゆう、日の地中ミズナシよりの義ヨシ處スル

能ク西キトモちりぬ察キリトカクミシカムニカリ
○ト彖曰、日明有天、漸入于地、照之不遠、复何獲、遂

と云ふ日の夜中より更に、馬をと遠かくさへて、地を走
り下駄を、遙かに、きつけた。まよひとせざる、静みす。
何うてよれり、

○十干詩断曰、驚無横失兩重、謹密須防暗内來、と云は
れの様矣。ふき、すよ、情、りのき、財用の損失ありふるを、
○評曰、入地中掩傷明徳、と云ふ、ゆゑに、むのきを掩かく
をがぞく、名の由ゆよ、能行めりか、きがほじけよおあて、
かず写し、肉のゆと能ぢりて、失ざつむの情もて、

○
地水師

○繇曰、師貞、丈人吉、无咎

もむぞ、師の道をなほれとせやと決だ。からざれば民を
からざる者、丈人よりては將すは衆へたゞび勝ち。
帝の行と、改正へくしてあまがりとひきば、徳人也。
よそゆる哉、師のほたうるぞ、丈人の徳と情ぐもを。
○彖曰、師衆也、貞正也、能以衆正可以王矣、と
以是も、衆へとたゞ發ふべく、もろくのいは飯後もりやもあ
るハ、王たりがどきぞ、古經よ、王者の兵をかこすとハ、一つの不

義仲行ひ、一の轍あらざるを殺して、天下を得らるゝせば、
あいつわが情ぐまにぞ、け卦の徳ありと、下の九二剛が
中少辰冲道と得らるゝより上の君たゞ、お意じて是を信
じ。往むるをあうぞ、まよ伝陰道のけにしきとある共、順路找
まろね、害あらぎして、民あらざるとあらぞ、せつわざ財
と傷り、人を害ともかく、羣もちがふくよ情ぐをせ
○象曰、地中ナウニアルハ有木師、君子以容民畜衆、といふは、
木の地下モツテみあつまシナリ、衆衆モロクマツルの象モツテ、君子是を取く、其
臣ヤシナヒを容保マツル、も衆モロクマツルと畜衆モツテ、
ちく衆人タクスンジン、事タクスの情モチとしてすきあり、
○初六、師出以律、否藏アシ、此何よりシテ、師のゆイハあり、
弟ハはよ食エサシをあそく、礼セレを禁シテ、暴ホウを傷シテるを、勤キラと怠シテ、
怠シテ然シテ若カノ勤キラひどく、弟ハはよ食エサシを禁シテば、若カノ之シテ共シテ乃
みちもひうごけにわよて、兵ヒサシを殃シテ、弟ハを害シテるを多く、
号全節制ガラレイセツセイ さやとして、衆人スヤリツを統スヤリツ律スヤリツのたゞ、安法キラナレバと守スヤリツ
て、物の始ハシめとよく、忙时ハシハをもつり、
○象曰、師出以律、失律カニ也、と云は、師サスニとかずよ、律リツ
カはとまればよしと、たゞしきはを失フとあまそハ、律リツ

事あつても、山きど、常の行ひもまと、けんお試情あり
てをきり、

○九二、在師中吉无咎。王三錫命。けあ。至無ハニ
の一爻、衆陰の爻。すよして、師の主としり、モ主と制
きるぞ。専らなると伏たのめば、りくるの道。うしもひ功とな
まの理。ふきぬよ。けもふまと、ハ。は遠ゆ行、バ。ちもとの義あり
くら五の爻。すゑぎるねよ。王三錫命。と云く。憲命
せたすよとあつし。めし。との事よと。うへよと。主あるを
らとも。功よほこり。うちの情あるを。きふも。

○象曰、在師中吉。事天寵也。王三錫命。懷萬邦也。
と云は。とく。任ざうう。吏あらば。う。も主よ。從て。情と
きは。王三陽の思。命めきて。も功よほころと云。そ。万邦
をも。うつけ。厚きんずり。わおもく。をきり。

○六三、師或輿戸。けあ。上を下のよもて。其
位。み齒く。も。往よあづかるとつ。共。主。方陰。至。よして。中
正。のたぐ。とき。と。得。ど。師。ハ。も。將。たゞ。の。主。を。も。ほ。て。
功。さ。か。ま。の。ぞ。想。よ。も。わ。よ。あ。う。ぎ。く。も。主。伏。ほ。き。ど
ろ。と。も。く。ハ。功。被。な。き。べ。と。あ。き。ぞ。せ。い。翁。ね。い。の

功をうむさる所によ、情をくわゆるにあり

○象曰、師サ或ヒハ輿ルトハ尸ヲニニ大ルキニ无コウ功コウ也、と云ハ陰柔ヨシク陽リカニの
位ヘタよりヨリよりヨリ、其志シハ剛ハリよリて、ほホとトにニあアきキたタ、其才シカ
柔ヨシよリて、功コウをヲさサきキぞゾけケつツわワよモて、物モノのノ筋サミ創イテるルと
なナまマくクよヨ情ジョウどドもモうウ。

○六四 師左次无咎、噬嗑丁而不吝。師進之不強
勇テラの進テルに止ムみシまセれタ、シ交スら陰原シテく、陰ウニの位シテ
なる故シテよ捷スミキヤるをシテかリむトとシ、進ムとシはシまセる若
少シらシどシ、シけシいシ小シ而シ止ムとシくシハシまセりシ、進ムとシ
きシ休シるシくシハシ退ムとシくシ情シくシ強シくシ進ムとシくシ宣シ教シ
凡シ合シありシてシちシりシ、

象曰、左次无咎、未失常也。と云ち、師行の道
ハ時よりく宜、さうもと常とまじりて、玄程よ難むる
と云く、退、とあらハ師の常からざく、けんわと多く情ニ
是非と進ムとすく、宜、とん倉あらそとすにかく、

○六五、田有禽利執言无咎。長子帥師。弟子輿尸。貞吉。一作主而立。考之位。少。師。吉。主。人。のことをひで。寂賊のことをい。もの。生民の害。なまきのあら。

時ハ律^{チラ}きりと禽獸^{キンシウ}の甲^{タヌ}よへく、立敷^{タケ}とたうを放^{カツ}捕^{サル}木
うちハ第^{チヨ}よわめて智^チもにぞ、立程^{タス}よしに將^シす任^シむると云
長子と云^セ。宵子^{テイシ}と云^ス。主^シたうもも^ハあらう^カるの義^ミ。
サツ^{サツ}おと以^シ帝^{ミコト}のちみも^トを大臣^{チムニ}よ任^シする情^{シテ}と云^ス。

○象曰、長子、帥^{フジハ}師^ラ、以^シ中行^ハ也。宵子、輿^{ヒルハ}戶^{ツカツア}使^シ不^シ當^{アタラ}也。
立^{シテ}すも^ハ中^シのたゞ^シに任^シさんと云^ス。今^シ其^シ任^シを立^{シテ}、^{シテ}行^シとあらも^モ、モ篤^シのりの極^シく、^{シテ}立^{シテ}とほ^シきど^シ。もも^ハはつ^シまのあ^リさるけり、^{シテ}けり持^シて、^{シテ}情^{シテ}あると云^ス。

○上六、大君有^リ命、開^ハ國^ク、承^ハ家^{イヘラ}、小人勿^レ用^ハ。此^{アリ}主^シ也。
处^シを師^ハの終^ハ、ナラヨモ^リ、功^ハの如^シ御^シま^ハ方^ハ也。立程^ヨ大君^ハ
其^シ功^ハを責^メ、^{シテ}彷^ハ侯^{アキ}と^シも^シ、危^シ告^シ少^シよ^リて、^{シテ}ハ、
主^シ功^ハある共^ハ、主^シ位^ハよ^リめざせ^シるも^ハ、やご^リうを^シて、^{シテ}主^シ功^ハ
ほ^シう^シとあるを^シけい^シね^シ時^ハ、主^シ功^ハあるも^ハ、主^シ事^ハよ^リは
こらざ^シの時^ハも^シそ^シる。

○象曰、大君有^リ命、以^シ正功^ハ也。小人、勿^レ用^ハ。必^シ亂^ハ邦^ニ也。
といふは、大君^ハ師^ハの終^ハ、^{シテ}主^シ功^ハあると^シも^シ、主^シ功^ハを^シた^ム、
主^シ功^ハあると^シも^シ、其^シ功^ハを^シた^ムを^シ、^{シテ}を^シど^ム。

小なり。百家并亂とあらざ。されば、考の行もけむわせ
情より功をもつても、主功をたのまうる程よ。情ぐるをや。
○元龜曰、天馬出群之課、とりふらんすまづく才
ありく。衆人の駿敏をもとあらむ。是がふ寡服衆と云
義なり。

○ト解曰、將軍臺上立執印者人膝跪於臺下
とつら衆人とはうきどりと信と尼して、主功のほまれ
ある支人の西おあら移よ心をつきて、ひきをひきの義也。
○ト象曰、師卦、從末不獨行。衆人阿黨、曲相成
まつらち師の卦ハ、ゆきり獨立、さりとあらきぞ、衆
人とし仲合て、きびしきとせなまくは、おうへあるのん持よそ
うにゆきり。

○十干詩断曰、衆力推搜處、无心遂有權、と云々、
衆人よりいきえきしる支あらバ、よりよもうござひて、
紙をもとの義なり。

○良為山

○繇曰、良其背不獲其身、行其庭不見其人、无咎。艮䷳、とてあるとよむぞ、人の止䷰、前すあまひと、背卦止と云、背みぐる而目前の敵よりうりとふきの敵とを、其身と見せしめて、帝を忘くられ、目あよいもどりをありても、いざ乱じ、剣をとひ、行モ度不見其人、度りゆかねよ文もうりとふきがよ、肉欲萌えりふく、モ道よ止居えんぢの、慎ふく若ふすくを也。

○彖曰、艮止也、時止則止、時行則行動、靜不失其時、其道光明、と云ハ止の道なると、其時の實すあま、モ能とひせざれ

べあなるとを時されむハ理よあとかひ、義よはすより其道
先ゆすて、方よありうるゝあり去程よ、奉子ハ時を責メリトブエテ找
専モツハラシテ、止ゞき及よく止リモもシニ無シ、モ通却風モコツカツフウモアド、慎
でよむがり、

○初六、艮其趾、无咎、利永貞。一はあゝ是はトナリ
距よかゝどりぞ、趾古動エテの先あらひのこ、吉往よ、其の動ヒタル
初爻をく、とく止ムニテ、以財之智をき、モ此心おとし、永貞固乃
道林悽ちうば、此の義をふ失しき也。

とあくまでざりて、自由とふたと、肺のあたり動となきど
しけんわざれ哉言極きを、邪が行用ひらまび、王へうら
よからざるをありとも、是と極どもものほことあらば後よハ
跡ふとありくと書きなり。

○象曰、不極其隨未退聽也。　と云は、毫を極むべしと、
只くもとがふと、肺の邪と動とあくせざれ共股よ隣て動、
隣よ隣の情をもくすれあり。

○九三、艮其限，列其寅，厲薰心。　はめぬと、陽剛と、
陽往と歩く、けふらき、立すあむせざる下あり、下引乃

終、上体の終而かす限となり、是剛よあく、一偏よも限よ皆
小ちうと屬伸進退うちても、自ゆからざる甚薰きと
ぞくと下ね津を、下上、下左下と割くよ限どに在席よ
して心を下るもぞ、心おと情、下渴よ止む、宜さまから、下
衆人とももき、度てうる松よ時くより、

○象曰、艮其限，危薰心也。　と云は、モトよかく止進退を
とあるをき、あくらくいよからざるぞ能候ど、宣子既てき、
○六四、艮其身无咎。　はあつてて無事の位よて止む、

す止とくも陰柔の才を、上剛湯の君よ遇づるかよ、物語

少しだと、ハアニミ、これ共、互角ミツコトにてハ終、止、毋のりのこげ、蜀
主て、我方原罪ワガサイヨウヅ、化の支ハシマヒと、バモシヒモ共、モ身至モシタシ止、バ
元、咎の道モード也、モモテ、陽剛ヨウジョウの木、あるものよ、たまむ情ある主て、
モモトモ、

○象曰、良其身、止諸躬シトヨウコン也、と云ハ、身シム上アツて、あるをす
いを動アツムし、物のためよ遷ラツうざる極ヨハシマ、化の支ハシマヒは、止スルめがじ、ゆき
きも、一己イチジキよもそくへ正ハリすのや、けいわとも、穢アシが身シム止スルと、情シテ、心ハ、
○六五、艮其輔トドケルツノツニ、言有序悔コトアワテツイデ七、寡オカシ至シテ、否リの位ホシよ
どト、居リの、至シテ、否リの、至シテ、否リの、位ホシよ、
否リき、悔アハキ、正ハリ、悔アハキ、止スル、悔アハキ、止スル、言ハシマ、正ハリ、悔アハキ、
小コトは、止スル、否リき、悔アハキ、止スル、否リき、悔アハキ、止スル、否リき、悔アハキ、止スル、否リき、
○象曰、艮其輔ミツバツ、以中正也、と云は、意をば、中道ミツドウ止スル也、
と云をあり、けいわをひ、止スルべーと云々あり、

○上九、敦良吉、は、あり、而シテ、剛實ヨウセキのか、に、まとと、と、良の主シム、
ひらぎ、を、續シテ、良の、終シテ、あ、是シテ、厚シテ、寔シテ、ある、と、極シテ、た、もの、との、
ど、ぐ、ま、と、終シテ、良の、終シテ、あ、是シテ、厚シテ、寔シテ、ある、と、極シテ、た、もの、との、
終シテ、あ、つき、か、止スルの、道シテ、お、て、た、を、す、も、ち、ふ、ぎ、ば、い、お、そ、
經シテ、す、く、も、る、筋シテ、お、て、す、な、も、り、

○象曰、敦艮之吉、以厚终也。と云は也。敦艮をよく守
せん難とて、然も又支艮の極よ奉て、厚とも終也。よくまろの象也。
サリカを情ぐるにあり。

○元龜曰、遊魚避網立課。と云ハ、身の自由より不_レ放そく、
辛勞あらずて、功をほむるゝあると、積レ小从高と云ふあり。
○上解曰、艮者止也。其象如山艮之為字、如山之背。

と云は良の象ハ山也。主はたうと、人の若のぞくぢりて、主經す
物のねをもくと晴山のふれ動_レく、静_レくよきふり。

○上彖曰、不行不行路未_レ夷_レ坦_レ、と云は逆行もこまれ共

至路なづらうならざる事_レ止くいと安_レじ、難_レちるどニシテ居バ、
逃難のとも放_レト禊_レも、事もとあらもと云義あり。

○十干詩断曰、抱玉懷珠入琢磨、と云て、瑞玉のど_レ子
徳義あま_レ、あら玉_レきざる所_レ、と云て功をりをとあら玉_レ、陽和
の物_レ、利ま_レりど_レきの内_レもく、いとく不_レの外_レをあら玉_レ、ト
能_レ止_レく、時_レ坎_レ行_レ、と云_レありてよにあり。

品 山火 災

○繇曰、賁亨小利有攸往、ニハトヲルスヨニキリマリアルニ 賁無カガムとモモもモモげ卦陽
八陰ヤクニをカガム不ハ陰ハ陽ヤクニとかガムあハねシ小シ陰陽ヨウヨウとく交タマツ合ハシマツてトト文
通スルしてトト往ハシマツ大ヨツ凡ヨツやアケキハタヒをタヒ文アケキハタヒをタヒあハれハ
あハきハのハりハけハおハるハ宴ヨツとヨツ立タマツてタマツサシかガムりハありハてハ文シの
の道シテよハけハりハよハ情ヨシをヨシなりハ。

○彖曰、賁亨柔未而文剛ニハトヲルジラキタナカホルコラクハニトヲレ 故カシ亨ハシマツ、トト云ハシマツはハシマツ卦剛柔
故ハシマツ文シ而ハシマツ文シ剛ハシマツ、ハシマツ自ハシマツ御ハシマツのハシマツ亨ハシマツてハシマツ天アマのアマ文シよりハシマツ肉イナいハシマツ文シのハシマツ御ハシマツの
徳ハシマツあハシマツてハシマツもハシマツすハシマツよりハシマツはハシマツ人のアマ文シタハシマツれハシマツ、ハシマツ文シのハシマツ陰陽ヨウヨウ代ハシマツ

術と見て、時のうらやましく、人材に盡り又才をも
教化する風俗と多くなれ、臣人貴を用の道やばに持
き、文質兼備をもつておあり

○象曰、山下有火、賁。君子以明庶政、无敢折獄。云々、
山、木本萬物の山也、もやよ大あひて、光明をあらむる、
貴の象也、君子是をもんと、庶政を修、文以の法をなすをば、
わよそ、居するもの猶、を折す、以爲特て、輕々おもからざ、情
で寔を折し、もはなふの遠よ、及さる、變をもそれあらず、是、
○初九、尊其趾、舍車而徒。はあを處々、開闢のほんを
ひ、りきあひ、彼のなるか、其趾を貴ど云ぞ、君子剛陽の徳あ
リとつを修かゞよより、功をもりよ、德とハあけきをも行ひ、
西をひ、貴の象と、車を棄は、考の人の復、如あれ共、道すあり、
らぎれバ、轍すハせば、徒行と、易よ陸ひ、業を承む一て事す
安むと、寧む貴の道と、ればんお缺、慎みて、もむあり、
○象曰、舍車而徒、義弗棄也。と云は車を舍て、徒よ
行とは、モ棄と義すあらざりよ、うちど、去程す、猶、心安らむ
もあり、あこしむをよかど、正よきと云、但と貴なまめ情す

○象曰、賁其須、與上興也。○○は陰柔かゝるのハ、猶と明
よりをも支ねりと陽剛すをぶひとあきらうよして、貴と云
せば、一猪の匂すほえを玆と云ふの陽剛ふたりのと共すを
て貴の如きの情多そて、ひあり。

○九三 貞如濡如永貞吉。はぬり過と文財の様子あらまて
トトの二陰と爻ね貴がよ、至貴とぞ聖として潤正ふるを、能た
地の貴とよハ帝のいと、安むらとめうりのがよ、永貞とたゞ一
玉やれ、情ぢりてもむげ支一端、二陰のころすありて、も貞あ
て、润汚すあまどんを其に安下す、願となむるす情ぐゑ也。

○象曰、永貞、之吉、終莫、之陵也。云々、貲々於々考々。
永あきバ、人のああどうり、ああぐとわタテ、すすまうり、永自マリテ
たゞ一ときば、考々タテガ、永あきバ、人のめか、人アグトア

してまひぞ、はに病うて、人のあこへみかきる。あまよ、そに。

隠さがるをりて、のあこへみかきる。

○六四、貞如皤如、白馬輸如匪寇婚媾、はめに至矣。或
往吉。九五の貞正あきとも、車とつものありより、も貞と
なりがて意を去程す。モニシ、意きらむ。よろこがむと考
えらざ。專の床、グズくられ共、寢の處とぞあつよき。如
媾のトミあきバ、ね親のいと遙、トモも、もけしわを情ぐき。
○象曰、六四、當位疑也。匪寇婚媾、終无尤也。と云ハ非
夷と云志也。不尤とは、伏すありより、位すありざれ
ど、疑アリ。もくも、けしわを情、バ理の本義のありとハ、陰よ全く
ありより。隠あつとも、モ義あるものよ、親と、せんと云義也。

○六五、貞于丘園、束帛幾々吝。勿、往吉。有孚惠心，勿

往共、陰孚惠心。方往す。往吉。六五の剛陽よ。

ノミテ、ゾロアセ、如火之若、痴身柔弱。ヨリて、モ吉。心、化
の主たんと、貞と、主と。主と、痴とかきして、人のたまげをぬ
つハ、ハ、ならざる事うれした人、主と。ジタルも、モ功となセバ、猶

主をありとづく象也。

○象曰、六五、迄吉。有孚惠心，勿

功をあせば、卷を多く書くあるあり、左様子、那ノ智子、實と
ハナマキの、口わかてよひあり、

○上九、白貴元咎、はぬり處ハ既上少て貴の極からより、
堅ざり也バ、偽ありを去程よ、自ニ貴と云ハ、失ミコトを失、ざる者
よ、情質素シツソウなるにわかてよひあり、

○象曰、自貴元咎、上得志也、と云ハ、よあきそ、らすの君の、
陰柔あるものためよ貴、さあきそ、も、あきそく、貴の功あ
らぞ、さすより、強しく、情質、質素の、用カタ、用カタせよひあり、
○元龜曰、猛虎告非岩ニ課、と云ハ、たけき虎の、岩窟カニクサ、あり、
猛獸カニクサの、をもと、ど、震悚あり、と、然あり附ハ、強光カヤヒあり、
もと云葉也、

○上彖曰、喜慶爻加門庭、增飾カモイケテニシテ、と云ハ、亦門がきうぎまし、
もじとあ、バ、強物カニクサ、よほろと、もく、備退の情、あらバ、災カミ、き、禍、
あつまりて、無事あるもと云葉也、

○ト象曰、衆惡皆消滅、吉、喜自然生、と云は、もく、
の悪きつきて、もく、あと、自然。生もく變をやん、人の、くさ
む、怡い翁も、もく、道すより、すた脚て時、あく、矣、を、

大須曰、貴^{ヒノ}駕^{クニ}未^{ダシ}花^{ライ}錦^{キシ}生^{ミラス}け勤^{カツヤム}かざるの^{ミカベ}
衣^{アヒ}錦^{キシ}の^{コハ}意^{シテ}あり、人事^{コト}すそりて、官^{クニ}錦^{キシ}もこぞ^{シテ}繁
業^{アメ}あくもと云^{ハシマリ}意^{シテ}あり。



